特集5

ユネスコ無形文化遺産「風流踊」の地域における役割

文化庁文化財第一課
吉田　純子

風流踊のユネスコ無形文化遺産登録について

令和4年（2022年）11月30日、モロッコで開催されていた無形文化遺産保護条約の第17回政府間委員会において、「風流踊」がユネスコ無形文化遺産代表一覧表に記載（登録）されました。

「風流」は、古代後期から近世初期にかけての日本の祭礼や芸能に大きな影響をもたらした美意識です。そのような美意識のもと形作られ、その影響を色濃く残す芸能が、今日に小歌踊や念仏踊、太鼓踊、盆踊などの多様な姿で全国各地に伝承されています。このような特色を有する芸能を「風流踊」と総称し、国指定の重要無形民俗文化財41件を「風流踊」としてグループ化し、ユネスコに提案、そして令和4年に登録が決定されたというのが今回の経緯です。

提案にあたり、文化庁は風流踊の概要を次のようにまとめました。

「風流踊とは、華やかな、人目を惹く、という「風流」の精神を体現し、衣裳や持ちものに趣向をこらして、歌や、笛・太鼓・鉦などの囃子に合わせて踊る民俗芸能。除災や死者供養、豊作祈願、雨乞いなど、安寧な暮らしを願う人々の祈りが込められている。祭礼や年中行事などの機会に地域の人々が世代を超えて参加し、それぞれの地域の歴史と風土を反映し、多彩な姿で今日まで続く風流踊は、地域の活力の源として大きな役割を果たしている。」

風流踊を演じる目的

先にも申しましたように、風流踊は多様な姿を見せています。芸能の形態ばかりでなく、演じることによって期待される効果、役割もまた、伝承地域の歴史と風土に応じて様々です。41件の伝承を概観すれば、多くは比較的小さな地理的範囲内で、小規模な保護団体が伝承を担っています。このことは、かつて生活を共にする地域共同体ごとに、つつがない生活を送るために乗り越えなければならない悩みや問題、人知を超えて祈らねばならないことがあったということでしょう。また小さな子どもから高齢者までの各年齢層が、何らかの役割を担って踊りに関わっている場合が多いという点も風流踊の特色の一つです。地域の構成員がこぞって関係することで、結束力が生まれたものと思います。そして忘れがちであるのは、歌い、踊り、囃すことの楽しさです。集団で歌い踊ることによってもたらされた高揚感はいかばかりだったでしょうか。歌や踊りの上手、下手、誰それは格好いい、優雅だと言い合いながら、芸能そのものを磨き上げてきたのだと思います。そういう状況のなかから、地域のリーダーも生まれ、日々を乗り越える共同体の力も強くなっていったのではないかと思います。風流踊を紐解けば、地域の歴史や風土、人々の営みが見えてきます。風流踊は各地域の先人たちが安寧な生活を送るために考え出した知恵の集積であると私は考えています。

風流踊の多くは夏に行われています。自然災害や疫病の流行が夏に多いことに起因していると思います。干魃（ばつ）や水害、台風、虫害、

趣向をこらした衣裳で踊る（野原八幡宮風流　熊本県荒尾市）

疫病など、生活を脅かす禍はいったい何が原因で起こるのか。その原因を疫神やこの世に思いを残して亡くなった怨霊のしわざと考え、それを生活圏から追い払うための祭りが行われました。華やかなる神座を依り代にして、それを打楽器などで囃したて禍のもとを生活圏外に送り出すのですが、その祭りのなかで芸能が演じられ、次第に華やかに展開していきました。香川県まんのう町の「綾子踊」は雨乞いのための踊りとして踊り継がれてきました。また疫神送りの形態をもつ風流踊には、夏の芸能ではありませんが、京都市の「やすらい花」があります。桜の花びらが散るのにあわせて疫神も飛散するとし、花鎮めの祭りとして行われています。

「新野の盆踊」（長野県阿南町）

全国各地に広く伝承される風流踊に盆踊や念仏踊があります。新仏を「迎え、もてなし、送り出す」という風流踊に通底する構造がそこには見られます。長野県下伊那郡阿南町の「新野の盆踊」は、8月14日から17日の間、夜を徹して踊り、17日の早朝にムラ境で新霊を送り出すというものです。新野高原盆踊りの会の山下会長は、コロナ禍での中止期間を振り返り、「新野の夏といえば盆踊。盆踊をやめるとこんなに殺風景になるのかと思いました。盆踊をやることは全然苦労じゃない、やらないほうが苦労。精神的に辛い。供養や送りができず、この二年間に亡くなった方は本当に気の毒だったと思っています。」と語ります。念仏と習合した風流踊である「和合の念仏踊」（長野県下伊那郡阿南町）は、移住者とともに継承に取り組んでいます。念仏踊の芸能としての魅力に惹かれて和合に移住した若者もいて、移住者は継承の大きな力になっています。担い手に移住者が増えると供養という心持ちから離れていくのではと思っていましたが、念仏踊を教えてくれた先輩が一人、二人と亡くなって、お盆にその方々を迎えるということを積み重ねていくうちに感慨深いものが出てきたとのこと。コロナ禍にあっても新盆供養は欠かさず行ったということです。

皆で囃しながら踊る（近江湖南のサンヤレ踊り　滋賀県草津市）

風流踊の地域における現在的な役割

人々がその踊りに何を期待したのか。死者の供養は今日の私たちも共感できる目的ですが、自然災害や疫病の退散は、今や実感を持つことは難しいと思います。それでもなお、各地で風流踊は踊り継がれています。文化財だから、地域の文化だからということも動機付けの一つですが、少子高齢化、過疎化など、ますます継承が難しくなっている現在、風流踊を演じていくことの積極的な理由、目的がなければ、風流踊は次第にすたれていくものと思います。風流踊の地域における現在さらに未来の役割は何でしょうか。人と人との繋がりを作り、人々と地域との結びつきを強めることが大きな役割の一つだと思います。まんのう町の綾子踊保存会の白川会長は、綾子踊を継承する佐文地区について「綾子踊みたいな塊でできている、みんなそれで団結している。」とお話になったそうです。風流踊はこれからも人と人を繋ぎ、よりよく生きるための核となって、人々の手で受け継がれていくのだと、またそうであって欲しいと思っています。